

うたくなー石垣島の2つの取り組み

1. 島うたを楽しむ為に

令和元年5月28日

文：友利 宇宙（ともしひろし）

1. 古謡(こよう)

石垣島から南の島々、八重山諸島。これは、日本最南端の諸島に位置します。

石垣島は沖縄本島から約400キロ離れている為、文化に様々な違いが見られ、

島うたに関しても、八重山諸島と沖縄本島は異なる分類とされています。

八重山の島うたは大きく2種類に分けられており、**㊤**「古謡(こよう)」**㊦**「古典(こてん)」と称されます。

㊤「古謡(こよう)」は楽器を使わずに、人の声で表現する音楽です。

神の前で静かに奉納する曲や、労働歌として力強くたわれる曲があります。

㊦「古典(こてん)」は人の声に加え、三線(さんしん)等の楽器を演奏しながら表現する音楽です。

㊤**㊦**のどちらも、八重山の各島・各村でうたい継がれる曲や、同じ曲でも、それぞれ特有のうたい方が残っています。

歴史的には**㊤**の方が古く、私の出身村である石垣島の登野城村では、50曲以上が残っています。

八重山の**㊤**の中には、三線が誕生する以前(約500年以上前)からうたわれてきた曲もあり、

琉球古典音楽(琉球王朝時代の宮廷音楽)にも影響を与えました。

2:暮らしに音楽

古謡について、登野城村(石垣島内の村)の長老、知念清吉氏(※)からお話をお伺いしました。
第二次世界大戦終戦直後までは、「古謡」をうたう人の方が多く、
三線を弾きながらうたう「古典」が八重山で広まったのはそれよりも後だとの事です。

知念清吉氏のお若い頃は、八重山は物々交換で社会が成り立っている時代、
「お金」そのものがなく、娯楽といえば、唄う事が最高の楽しみであったそうです。
当時の田植えや田草取りは5・6名でグループをつくり、それぞれの田んぼを順番に巡って作業しました。
農作業をしながら古謡をうたい、古謡は自由で、
男女の組み合わせは関係なく、どの曲を誰がうたい始めるか決まっておらず、
誰かがうたい始めればそれにのり、その時の気持ちによって自由に選曲していました。

古謡の習い方は、うたが上手な長老宅へ同士で訪ねて稽古をしていました。
メモをとったり、メロディーや歌詞を真似し追いかける様にうたって覚えます。
現在 85 歳以の方々は、実際に農作業や家造りをしながら古謡をうたった体験をされていますが、
時代と共に、現在では知念清吉氏しかうたえない古謡も多くあります。

(※)知念清吉(ちねん せいきち)氏について

八重山古典音楽大濱用能流師範。

とびらーま大会(八重山古典音楽最高峰の祭典)歌唱の部最優秀賞の受賞や、
歌舞伎とコラボレーションする等、お若い頃から唄者(うたしゃ:古謡・古典三線奏者)として
ご活躍されています。

方言話者である知念清吉氏は、唄者を育てる先生方から助言を求められる存在でもあります。
また、村の行事も精力的に牽引され、優しい近所のおじーというキャラクターで、
村の方々からも愛されています。

3: 古謡の今

八重山の古謡は殆どが「農民の音楽」ですが、終戦後は急激な経済発展により、古謡の土台となる「農業」の分野にも、徐々に機械や農薬が取り入れられる等、変化が生まれました。その為、グループをつくって農作業を行う必要がなくなり、必然的に古謡をうたう機会もなくなっていきました。

また、八重山では、第二次世界大戦中に方言が禁止された(スパイ容疑)事が大きく影響し、終戦後、方言話者が激減しました。八重山の島うたは、古い時代の言葉で作詞されるため、内容を理解できる世代の高齢化が進んでいます。

音楽に関わらず、八重山は大津波や人头税、戦争など様々な影響により、残された文献が少ないと言われますが、登野城村では、平成4年になって、「登野城村古謡集」が編集され、登野城村の古謡、約50曲の歌詞が収められました。ただし、これには楽譜がありません。メロディーに関するものは、個人的な音源がある程度です。今では登野城村古謡集に収められている曲、全てをうたえる方が知念清吉氏のみとなってしまいました。

私は、知念清吉氏のうたう古謡を聞いていると、「泥臭い・海が遠くにある・緑が近い・生きる・繊細・複雑」というイメージと同時に、知念清吉の生きざまを想像させられます。

体に染みついた、耳当たりの良い綺麗な方言が飛び交う古き良き時代の中、機械の無い環境で農業に励み「うたうのが一番の楽しみだった」と話す、知念清吉の歴史を語らずとも、手つかずの自然の壮大さと、その生きざま全て余すことなく、うた声に凝縮されております。

平成30年、知念清吉氏と私は話し合い、登野城村の古謡をレコーディングする事にしました。数名でうたい上げるのが古謡の基本的な形なので、知念清吉氏本人の選ぶ登野城村の数名にご協力頂きました。レコーディングと編集に関しては、私の前職場の後輩が協力してくれました。その他、有志の協力の下、登野城村古謡集に収められている全曲をレコーディングする事ができました。

4:古謡の可能性

登野城村の古謡は、小さな島の小さな村の消えかかった島うたですが、私は「音」が、この島の魅力の一つであると捉えております。

自然と密接に生きてきた八重山の人々、その環境で育まれてきた音楽は、必然的に八重山の自然の音と合わせり調和します。

私共うたくなーは、

「観光の為の音楽ではなく、音楽の為に観光をとりいれる」活動を行っています。

自然の中で音楽を表現することで、ありのままの島うたを誰にでも楽しんで頂けると考えています。

音楽によって聴覚に意識が集中し、徐々に五感に意識がいき届く、自然の美しさを全身で受け取れる、感性に訴えかける新しいアプローチの観光スタイルです。

今回、古謡のレコーディングのお手伝いをしながら、

音楽に限らず、伝統文化の「継承」について、私なりに考えを整理していく中で、

知念清吉氏のうたう古謡を「私もうたいたい」という気持ちがよりいっそう強くなりました。

現在、私共は古典を取り入れたツアーを多数開催しておりますが、

今後は、古謡も織り交ぜながらツアーを構成できればと思い描いております。

現代においても、古謡の美しさは八重山の自然の中でよりいっそう際立つことでしょう。

私共にできる事として、平成30年より知念清吉氏の協力のもと、

登野城村に唄い継がれる古謡のレコーディング活動を行っています。

この音源が、真の意味で古謡の継承に貢献できれば、この上ない喜びです。